インド文学に見る自己犠牲

―ホーリー祭縁起譚を中心に―

水野善文

はじめに

「もし洗脳されていたら、[1]誰だってやっちゃうんじゃないですか。」と詰まらぬ答えが口をついて出てしまった。世界を震撼させた、あの忌まわしい事件から半月ほど経ったある日、自爆について訊ねられた時のことだったが、それ以来ずっと、自分が曲がりなりにも専門と称しているインド文学の脈絡だったら'自爆'をキーワードにしてどんなことが窺えるのだろうかと気になっていた。

インドでは、一九九一年、当時の首相ラージーヴ・ガンディーが自爆テロで暗殺されている。ちょうど筆者が留学滞在中だったこともあり、記憶の中に鮮明に留まっている。当時は考えてもみなかったことだが、今回の出来事が契機となって、そうした行動に人間を駆り立てる精神的、思想的土壌[2]がどの辺りにあるのか文献に沿って考察してみようと思い至った。ただ、'自爆'という語を字義通りに用いるとなると、時代が限定されてしまい、古典から中世後期までを主な研究対象としている筆者には到底能いそうにない。そこで、'自己犠牲'と題してみたが、概念が大幅に拡大してしまうし、語感の違いも否めない。念のため付言するが、自己犠牲という言葉を使うからといって、この言葉の中に自らの価値判断を含めようとする意図はまったくない。冷静に観察するのみである。

悠久の歴史に豊富な文学を有するインドのこと、隈無く観察するにはかなりの時間と労力が必要となる。ここでは、限られた筆者の知識と紙幅の中で、ほんの一端を紹介するに過ぎないことを予めお断りしておく。

ホーリー祭

他者に危害を加えることを目的とした自己犠牲の例として、まず思い出されるのは、ホーリー（holī）祭という春祭りに纏わる神話の中の鬼女ホーリカー（Holikā）である。[3]ホーリー祭は人々が色水を掛け合って遊ぶことで良く知られ、[4]クリシュナ神（ヴィシュヌ神の化身の一人）を祀るとされるのが今日の一般常識であるが、様々な要素が融合しているようである。要約紹介に適しているヒンディー語読本の一節を邦訳して提示しておこう。（　）内は訳者によって補った語句である。

ホーリーは春祝われる。この時期までに収穫が終わり、家々には穀物が蓄えられる。日本やロシア、その他の国々に於いても収穫のあと祭りが執り行われるが、この祭りについても、いくつもの由来が語られている。

カンサが自分の甥クリシュナを殺そうと侍女プータナーを遣わした。[6]だが、プータナーはクリシュナを殺すことができず、自分のほうが死んでしまった。ブラジの人々がプータナーを焼いた日がホーリーの日だった。[7]

もう一つの話はこうだ。何千年も昔、ヒランニャカシプという名の王がいた。彼は神を信仰していなかった。彼の息子プラフラーダは敬虔な（ヴィシュヌ神の）信仰者だった。父親は自分の息子のこの習性を憂い、殺したいと思った。毒蛇に咬まれてもプラフラーダが死なないので、王は自分の妹ホーリカーを呼びつけた。彼女は、懐にプラフラーダを抱え、燃えさかる火の中に飛び込んだ。けれどもプラフラーダは助かり、ホーリカーだけが死んでしまった。プラーナ文献のこれらの話から、自業自得の理が知られる。正しい道を歩む者を、神はいつも見守っているのだ。

ホーリーの前日、郊外で薪が集められ、それに火が付けられる。翌朝、人々は焼き焦げた木炭（の粉）を自分の額に塗り、互いに色水を掛け会う。インドで言い伝えられているところでは、赤色が愛の象徴とされているので、大抵赤い水を掛ける。互いの顔に赤い粉を塗りつけることもある。[8]その遊びを終えると、沐浴し、身体を洗って新しい服を着て、友人や親戚たちと喜びを分かちあう。ホーリーの日には、かつて抱いていた悪意・邪心をも洗い流すと言われている。このようにホーリー祭は誰もが歓喜して祝う祭りなのである。[Harris: 162-163]

右の傍点（筆者による）部分、ホーリカーがプラフラーダ(Prahlāda)を殺害しようとした時とった行動は、我が身もろとも他を破壊するまさに自爆的行為である。では、どうして彼女はそのような行動にでたのか、背景をもう少し詳しく追求してみよう。

一七・一八世紀に北東インド（あるいは、もっと限定してカリンガ（現オリッサ）地方とも［Chatterjee:182］）で成立したとされる、サンスクリットによる『ホーラーカーの偉大性(*Holākā-māhātmya*)』という文献に詳述されていることが予想されるが、あいにく刊本がない。[9]

インド各地で様々に繰り広げられている春祭りの諸事例の関連性を、文献に基づいて研究したアンダーソン［Anderson：19］（および［Caturvedī：225-234］）によると、『バヴィッシュヤ・プラーナ(*Bhaviṣya-Purāṇa*)』にホーリカーの記述がなされている章があるということなので、以下にその部分を訳出する。なお、同プラーナの第一巻は紀元後五〇〇年ころ成立したと見なされているが、訳出部分が含まれる第三巻は八世紀の末ころ出来たらしい［Rocher: 151-154］。変則部分もあるが、ほぼ全体にサンスクリット文学で最もポピュラーな韻律、シュローカ（一六音節×二行）が用いられている。（　）内に同義語および訳出上補った語を入れて示す。また、詩節の番号をそれぞれの末尾に付す。

Bhaviṣya Purāṇa III, 132

ユディシュティラが言いました。[10]

「パールグナ月[11]、月満ちて、眩いまでのお方（＝クリシュナ様）！　村という村、街という街、どうして祭りが　祝われるので　ございまするか？（一）

どうして　子供ら　家々で、馬鹿騒ぎなぞ　するのでしょう？　パールグナ月最後の日、なにゆえホーリカー　焚かれるのですか？　何か謂われは　ありますか？（二）

『アダーダー』って合言葉、何ですか？『シートーシュナー（＝冷たく熱い女）』って　何を言っているのでしょう？　いずれの神が　祀られるのです？　この地において。　誰によって　これ（＝女性原理）は　降臨されたのですか？　このとき　何がなされるべきか、細かく教えて　くださいな。クリシュナ様！（三）」

クリシュナが言いました。
「バールタ（＝ユディシュティラ）！　かつてクリタの時代、[12]ラグという名の　王がいた。勇敢、有徳で、見識深く、物腰柔らか。（四）
　その王、全土を征圧、諸侯を統率、ダルマ（＝法）のもとにて　臣民を　我が子のように　保護しておった。（五）
　飢饉、疫病、不慮の死すらも　起こることなく、彼の治世のあいだには、町民に邪心の芽生えることもなく。（六）
　こうして　この王　武士道備え　国を治めていたところ、町民たちが　皆集い来て、『助けて！助けて！』　訴えた。（七）
　町民たち　曰く、
『我らの家に、得体の知れぬ　ダゥンダーなる羅刹女が　夜と昼なく　やって来て、力ずく　子供らを　害するのです。（八）
　王様！　どう防ごうとも、応じても、マントラ（＝まじない）を知る　優れた師たちに　よってさえ、そいつは制御　できませぬ。（九）』
　町民たちの　言葉を聞いて、ラグ王は、驚き怯えて　顧問の僧に　こう言った。（一〇）
　ラグ王　曰く、
『再生族（＝バラモン）の筆頭よ！　ダゥンダーとは　どんな羅刹女　なのですか？　どんな力を　持っていますか？　悪さしでかす　こいつめは、吾輩により如何に退治が　できようか？（一一）
　守護する故に　王と呼ばれ、大地を護る　故にこそ　主なり。大地を守護せぬ王なぞは、悪人なりや。（一二）』
　ヴァシシュタ（＝顧問僧）　曰く
『王様、お聞き下さいな。かつて明かしたことのない　他人の秘密を。ダゥンダーと　名のるところの羅刹女は、マーリンの娘です。（一三）
　昔、彼女の崇めるシヴァ神が　（彼女の）激しい苦行に　惚れ込んで、言ったのです。
　〝貴女の望みを　言いなさい、良く誓戒を　保持する方よ！（一四）
　貴女の心が望むもの、何でも叶えてあげましょう、躊躇いもなく。〟と。
　ダゥンダーは　最高神（＝シヴァ神）に　言いました。
　〝もし　わたくしを　お気に召しておいでなら、
　シャンカラ（＝シヴァ）様！（一五）
　わたくしを、神々だろうと人間だろうと　決してうち負かせない身となし賜え。あなた様は　武器飛び道具で　三界に　並ぶ者なし。
　私もそうなりたいのよ。（一六）
　寒季だろうと　暑季だろと　雨の季節も、夜も昼も、外でも家でも、いついつも、私しゃ　あなたのお陰で　恐れなし、
　大自在神（＝シヴァ神）様！〟（一七）
　シャンカラ（＝シヴァ神）が言いました。
　〝仰るように　してしんぜよう。〟
　と、彼女に言って　更にまた　三叉戟もつ者（＝シヴァ神）は付言した。
　〝熱狂する（or酒に酔った）人たちや　子供たちにゃ、脅かされて
　しまうでしょう、季節ごと。運の良い方！　心に怯えを
　感ぜぬように！〟（一八）
　こうして　尊き　バガの眼の破壊者（＝シヴァ神）が　彼女の望みを　叶えてあげました。夢に出て、名が体示す　その神は　まさにその場で、姿消す。（一九）
　一方、神からご加護を頂戴し、かの羅刹女は　意のままに　姿を変えて、いついつも　ハラ（＝シヴァ神）の言葉を思い出し、子供らを　痛めつけておりました。（二〇）
　家では主婦がアダーダーと　魔除けのまじない　掛けてます。
それで巷も　その羅刹女をアダーダーと　呼んでます。（二一）
　これで全てです、私が言える　ダゥンダーの行状の。では
今から、そいつが討たれる方策を　お教えしましょう。（二二）
　王様！　今日は　パールグナ月　白半月の第十五日。
寒い季節がゆき去って、朝には暖く　なるでしょう。（二三）
　人々に　無畏施[13]を授けなくては　なりません。王様！
今日人々が、恐れなく　楽しんだり　笑ったり　するように。（二四）
　子供らは　血気盛んな戦士のように　木の棒　手に取り
喜び勇んで　進むべし。（二五）
　枯れ木や　石を　山にせよ。　それに火を付け　儀規どおり、

羅刹退治の　重厚な　マントラとともに。そのあと、キラキラーという声、
楽しく拍手をうちながら　その火の周りを　三回巡り、歌えや　笑え！
世の人々　疑念なく　心の思い　気の済むままに　喋ってしまえ！（二六―二七）
　この声や　護摩の火により　かの罪女　退散し、子供らの
目には見えない打撃によって　羅刹女は　滅んでしまうでしょう。（二八）】

（クリシュナの言）
　この聖仙（＝顧問僧）の　言葉を聞き入れ　その王は、
パーンドゥの子（＝ユディシュティラ）よ！　その賢者によって
語られたこと　悉くなしたのじゃ。（二九）
　その羅刹女は、この厳とした行為によって　死んだのじゃ。このとき以来
この世では、アダーダーと　呼ばれるように　なったのじゃ。（三〇）
　一切悪を吹き払い　あらゆる病を鎮めてくれる　ホーマ（＝護摩）が
バラモンにより　この世でなされる。パールタ（＝ユディシュティラ）！
それゆえ　彼女がホーリカーだと　思われたのじゃ。（三一）
　これ（＝ホーリカー）はもと　あらゆる精髄のなかで　最高じゃった。
ユディシュティラ！　精髄ゆえに　バルグ（＝赤い、美しい）と（言われ）
この上のない喜びを与えるものであったのじゃ。（三二）
　パールタ（＝ユディシュティラ）！　この日　宵の口
子供らは家で守られるべし。牛糞の香りのついた　四角い　家の中庭などで。（三三）
　子供のそばに　武器を手に持つ　男らを　呼んでくるべし。男らは
棍棒を持ち　歌や笑いの種もって　子供ら守り、飴や料理も　あてがえる。（三四）
　こうして　ダゥンダーにやられる　罪が　避けられよう。だからこそ
その宵の口にこそ、子供らは　守られるべし。（三五）」
ユディシュティラが言いました。
「尊きお方！　夜明けには　安楽求める人々により　何がなされるべきですか？
　マーダヴァ月に　入ってすぐの　日の出どき。（三六）」
クリシュナが言いました。
「日課行　修してのちに　先祖の霊を慰めて、ホーリカーの灰
　崇めるべし、あらゆる過失を鎮めるために。（三七）
　きれいに飾られ　色塗られた　中庭に、色付けられた　清らかなる
穀付き大麦　もってして　最大限の四角形を　作るべし。（三八）
　その真ん中に　白い布被せた座を　しつらえよ。その前あたりに
薔で満たした　水瓶しつらえよ。穀付き大麦　黄金も入れ、
白梅檀で塗られたものを。水瓶の前　履き物　綺麗な衣を着た人々が
配置されるべし。（三九―四〇）
　坐す人の　祝詞に合わせ、バーラタ！　五体満足　吉相をもち、
紅蓮の上着に　紗まとった女が、（彼に）梅檀練り膏をぬり、頭から
凝乳　ドゥールヴァ草　大麦混ざった聖水　流せ。（四一―四二）
　長寿と息災　願いをこめて　梅檀練り膏　ぬらせた後に、学僧は
梅檀混ざった　マンゴー華の絞り汁　饗されるべし。（四三）
　（心に生ずる）愛神カーマの　儀礼が　聖仙らにより　示されたのじゃ。
春立つころに　梅檀入りの　マンゴー華の汁　飲む者たちは、
心に留める要望の　まさしき実現即座に　生ずるなり。間髪入れず
バラモンたち、吟唱詩人（スータ）吟遊詩人（マーガダ）
称讃詠唱者（バンディン）に　布施を与えよ、愛神カーマが　我を愛せよ　と。
それから、食事時　まず　前日に調理した　料理を食べよ。その後は
自由に　食べて良い。このように　論書の規定にしたがって
パールグナの祭りを　行う者は、あらゆる望み　叶うなり、いと易く。
痛みや病い　消え失せる、疑いもなく。（四四―四八）
　子や孫ともども　人々は　安楽にいたれり。（四九）
　目出度く　清浄　勝利をもたらし、あらゆる障害取り除く、
日々の中の最高の日が　語られたのじゃ。パールタよ！（五〇）
　寒季が過ぎて　白半月の第十五日と、翌朝　春到来したとき、
梅檀とともに　マンゴー華の絞り汁を　必ず　のむべし。パールタ！
すれば　人は　安楽にあり。（五一）」
以上、尊きバヴィッシュヤ・プラーナ完結巻のクリシュナとユディシュティラの対話における、〝パールグナ月満月祭の説明〟と題する第一三二章。[*Bhavisya-maha-purāṇa*: 492-493]

やや冗長だったが、ホーリカーに纏わる話を紹介した。だが

しかし、今求めたい肝心なホーリカーの自爆的行為に関しては言及がないし、そもそもプラフラーダは全く登場してこない。ただ、ホーリカーの正体がダウンダー(Ḍaunḍā)という羅刹女で、苦行を修したことの褒美としてシヴァ神より、誰にも殺されない力を授かったが、子供と馬鹿騒ぎには弱みがあるとされたので、日頃子供たちに害を加える、我が国にも至った鬼子母神すなわちハーリティー(Hāriti)にも似た存在であったことが分かった。[15]そして、それを退治することが、このテキストではパールグナ月の満月祭と呼ぶ、ホーリー祭と同等の春祭りの起源として示されていた。

では次に、プラフラーダ伝説について見てみよう。

プラフラーダ伝説

先にも紹介したアンダーソンは、プラフラーダの物語がホーリー祭と結びつくのはかなり後代になってからであると指摘している[Anderson: 170]。だが、ここでは、プラフラーダ伝説そのものについて、もう少し詳しく知っておかねばならない。

プラフラーダ伝説に関して、おそらく最も詳細になされている研究はP・ハッカーによるものであろう。そこには、ヴェーダ文献から始まって、『マハーバーラタ』、諸プラーナ文献に至るまで、様々な作品の中に載っているプラフラーダ伝説の諸バージョンを紹介している[Hacker]。この他にも、プラフラーダ伝説を扱った研究及びこれに関説する研究は枚挙にいとまがない。テキスト自体、サンスクリットによる数多くのヴァージョンが存在するのみならず、一三世紀アッサミー文学の草創期の代表作として[田中・坂田: 133]、また中世ヒンディー文学（就中ブラジ・バーシャー文学）では、一七世紀初頭プラーンチャンドゥ・チャウハーン（Prāṇcand Cauhān）[McGregor: 109 note]と一八世紀初頭ラージャスターンの宗教詩人ジャン・ゴーパール（Jan Gopāl）[Lorenzen]によって、いずれも同じ題名の『プラフラードゥの所行（*Prahlād-carit*）』という作品が編まれている。[16]さらに近現代、プラフラーダを主題とした戯曲作品もしばしば創作されている。[17]こうした例を一瞥するだけでも、インドの文化史、とりわけヴィシュヌ信仰史の中で、この伝説が如何に重要視され続けてきたか、窺い知ることができる。

今、近代語ヴァージョンを暫く脇に置き、サンスクリットの諸ヴァージョンについて見れば、『バーガヴァタ・プラーナ（*Bhāgavata Purāṇa*）』（九世紀前後に南インドで成立）の中で述べられるプラフラーダ伝説が古典的伝承の最終形態であろう[Rocher: 142]と言うことなので、これに沿って紹介しよう。だが、同プラーナの第七巻第一章から第九章まで、シュローカおよびこれより音節数の多い韻律を用いた詩節で約四五〇偈ほどからなる全体の訳出をここに提示することはできないから、要約のみとする。

> 魔王（＝羅刹の王[Mani:595]）ヒランニャカシプは兄弟をヴィシュヌ神によって殺されたので、復讐のため、無敵の身になろうと苦行に励んだ。その苦行の炎で世界中が苦しめられると、神々は梵天（＝ブラフマー神）に助けを求めた。梵天は苦行を中止させるため、交換条件を呑むことにした。ヒランニャカシプは、自分が人間、獣、神々、阿修羅（＝悪魔）によって殺されることがないように、と希望したので、梵天はその通り叶えてやった。
>
> 彼の息子プラフラーダは敬虔なヴィシュヌ信者であった。父ヒランニャカシプ

が家庭教師をつけて彼に信仰を捨てさせる教育を施しても、効果がなかった。更には悪魔たちに命じて殺させようとしても、ヴィシュヌの御加護のもとプラフラーダは悉く助かった。とうとう自ら息子を殺めようと決心した。ヒランニャカシプが拳を振るうと、当たって砕けた柱の内部から人獅子（ヌリシンハ）に化身していたヴィシュヌが現れ、ヒランニャカシプは逆に殺されてしまった。（梵天に願い出て、決して殺されることがないとされていたのは、相手が人間、獣、神々、悪魔である場合に限られていたのであり、虚を衝かれ、そのいずれでもない、頭がライオン、身体が人間という人獅子の姿をした相手であったから、殺されてしまったのだという。）この後、プラフラーダはヴィシュヌへの讃歌を歌い、ヴィシュヌを満足させ、父の贖罪を願い出ると、ヴィシュヌは彼を褒め称えた。（主に［上村 一九八一：221-224］を参照）

ここではホーリカーが登場せず、ヒランニャカシプ自身が息子プラフラーダの殺害を図っている。だが、自分の懐に抱いて火中に飛び込むといったような自爆行為ではない。ただ、苦行を修したことによって、身体不滅という特別の能力を授かるモチーフは、先のホーリカーの場合と共通している。（ホーリカーの場合はシヴァ神から授かったが、ここでは梵天すなわちブラフマー神より授かっている点が異なる。）

一方、ヒンディー・ヴァージョンの一つジャン・ゴーパール版（一八世紀初頭）の『プラフラードゥの所行』第一三章には、最初に提示したホーリー祭の概説にあったように、ヒランニャカシプの妹（あるいは姉）ホーリー（Horī：1でなくr）[18]が登場し、「私はシヴァ神より授かった能力により、火中に入っても燃えない身体を持っていますから、プラフラーダを抱いて燃えさかる薪の中に飛び込みましょう。」と、自爆行為の意思表明をし、実行に移すところがある［Lorenzen:65,130］。

文献（それも、今手許にある文献）に依拠する限り、ジャン・ゴーパール版で初めてプラフラーダ伝説とホーリカー伝説の融合された形が出てきているので、アンダーソンの指摘どおり、両者の融合は一八世紀以降である可能性が高いと言えよう。そして、融合した伝説の中にのみ、ホーリカーの自爆的行為が語られていることを知ったわけだが、先に一部紹介したバヴィッシュヤ、バーガヴァタ両プラーナから九〇〇年近く時間が経過する間に、どういう伝承上の揺らぎがあったのか、アッサミー・ヴァージョン等の他の文献を調査するなど、手掛かりを他に求めざるを得ない。

ここでは、こうしたテキスト伝承の問題には深入りせず、自己犠牲という本題に集中して更に検討してみたい。ところが、ジャン・ゴーパール版の記述によれば、ホーリカーは火の中に飛び込んでも自分が死ぬことはないと確信していた。となれば、結果的には死んで犠牲となってしまうとしても、それを犠牲的精神による行為、自己犠牲と見なして良いものか、甚だ怪しくなってしまうのではあるが。

ホーリカーにばかり注視していたが、対照的に、殺されそうになったプラフラーダの側に自己犠牲的精神があると指摘する学者もいる。いや、むしろ、プラフラーダ伝説を扱う研究の多くがバクティ（神への信愛と帰依）の一形態として、その特殊性を探求する脈絡で引用するのがほとんどであるから（［Bailey］［Schreiner］など）、こうした指摘は全く唐突なのではなく順当な研究経過の線上に位置すると言えるのである。即ちルクマニは『バーガヴァタ・プラーナ』第七巻第九章第四二―四四偈に（以下には第三九偈から訳出する）プラフラーダの、自己を顧み

ず、他者を慮る、利他精神（unselfishness）、自己犠牲精神（the spirit of self-sacrifice）の表出があると言っている［Rukmani: 44］。（ルクマニの英訳は過度の意訳なので、筆者がサンスクリットから邦訳する。）

Bhāgavata Purāṇa, VII.9

ヴィクンタの主（＝ヴィシュヌ神）よ！（私の）心はあなたの仰ることには適いません。（私の心は）悪に汚れ、卑怯で、愛に溺れ、喜び、悲しみ、恐怖、衝動に堕しておりますので。あなたのような到達点に、悲しいかな、私がどうして達し得ましょうか？（三九）

ヴィシュヌ神よ！　一方では満足の足りない舌（＝食欲）が私をひっぱり、他方では男根（＝性欲）が、どこかでは皮膚、腹、耳が、また別のところで臭いが、またまたどこかで落ち着かない眼や活動力が（私を引っ張るのです）。あたかも大勢の妾たちが一人の夫を引き裂くように。（四〇）

このように、生存という三途の川に落ち、誕生と死との繰り返しを恐れ、自己と他者とを分かちて敵味方をつくるような、愚鈍な人間をご覧になったら、すぐに、「ほら、こっちだよ！」と言って、助けてあげて下さい。彼岸に達している方（＝ヴィシュヌ神）よ！（四一）

全ての人の師である方（＝ヴィシュヌ神）よ！　あなたにどんな労苦があるというのでしょうか？　この生存世界における生起と破壊の原因を有する人を救うに際して。愚かな者には高邁さへの嗜好があります。苦しむ者の友（＝ヴィシュヌ神）よ！あなたを愛し、尊崇する者にとって、それ（＝高邁さ）があっても無駄なのです。（四二）

最高者（＝ヴィシュヌ神）よ！　私は渡ることの困難な三途の川を恐れはしません。私はあなたのお力を讃える歌という偉大な甘露（＝不死の霊薬）に沈む心を有しておりますから。そこから顔をそむけ感覚器官の対象よりもたらされる幻の喜びを求めて重荷を背負っている愚か者たちを嘆かわしく思います。（四三）

神よ！　ふつう自分の解脱を求める修行者たちは、必死に沈黙の行を修します。（しかし）他人のために尽くそうとはしません。この可哀想な人たちをさしおいて、（私は）ただ一人解脱しようとは思いません。あなた以外に、その彷徨い人の寄る辺となる者を知りません。（四四）［Goswami: 774-775］

ここに見る自己犠牲的精神とは、勿論、他者に危害を加えるためではなく、他者の救済を目的としている。もっと言えば、万物に遍満する絶対神ヴィシュヌを一途に信じ愛することによって万物との一体感を得ることができ、自他の弁別すら超越しうる境地へと至る。そうした境地、即ち神との合一をめざしての自己放棄と見ることができよう。

ホーリー祭縁起譚の中では自爆的行為を受ける側のプラフラーダが、インド精神史上に傑出した自己犠牲精神の持ち主であったことに留意したい。

ジャータカ、菩薩行

『バーガヴァタ・プラーナ』という文献は、過去一〇〇〇年ほどにわたって培われてきたバクティの完成した形を盛っているとされるものだが、この引用部分からは、ルクマニが指摘している［Rukmani:44］ように、「自未度先度他（自らは未だ悟りの境地に至っておらずとも先に他者を悟らせる）」を旨とする大乗仏教の菩薩行の思想をも連想させられる。

菩薩行的自己犠牲といえば、大乗仏教の興起に先立って、紀元前四―三世紀から後一世紀頃にかけて、民衆の間で語り伝えられていた諸々の説話がブッダの過去世物語等に改変されて成ったジャータカの中に数多く見られる。たとえば法隆寺の玉虫厨子に描かれた捨身施虎図で良く知られている薩埵太子物語では、飢えた虎の母子を救うため太子が自分の肉体を提供する。

こうした自己犠牲は、布施や忍耐を重んじる菩薩行の一環として実行されたものであり、ブッダは過去世において、他者の救済のために自分の身体をも顧みず尽くすという善業をなしたのだから、今生において覚者すなわちブッダとなり得たのだと解説される。こうした論理を可能たらしめた思想的基盤として、業および輪廻の思想の存在が指摘される［干潟：11-13］[19]。

ジャータカに纏められている個々の話の起源、成立過程を具に見ることは困難であるが、いずれも民話をベースにしているということから判断すれば、この時代、民衆の間には、信仰の対象が何れであっても、他者の救済・利益のための自己犠牲を是とする前提としての、輪廻転生・善悪因果応報の思想がひろく行き渡っていたことが窺える。

そうした思想が歴史の表舞台に最初に出てきたのはウパニシャッド期（紀元前七―四世紀）であるが、この頃既にインドには利他的な自己犠牲を育む素地が出来上がっていたと言えるだろう。

プラパッティ

しかし一方、同じくバクティの脈略の中に語られながらも、起源は異なる系譜に属するとされ、主にタントラ文献（六世紀以降）で言及されるプラパッティ（prapatti）と呼ばれる自己供儀の思想がある。これはまたニャーサ（寄託）、サンニャーサ（放棄）シャラナーガティ（帰依）、アートマ・アパルナ（自己供儀）などという呼称[20]も持つといわれる［徳永一九八九：220-221］。先の菩薩行的自己犠牲精神の基層には、他者の救済が自己の救済に帰結するという考え方があるように思うが、ここでは、宗教的人為努力の効果を認めず、自己の救済すら放棄し、一切を神の恩寵に委ねるのだという。祭祀という形をとる神に対する礼拝者の自己供儀と解され、神に実体的な力を認め、その恩寵に預かることを旨とするブラーフマナ文献（紀元前九―八世紀）の祭式尊重主義に由来する、と指摘されている［徳永一九八九：221］。

ここに見るのは、祭祀に於ける神への精神的な自己供儀であるから、実際に我が身を捧げるとか、傷つけるとかいった行動に出るわけではない。しかし自己を虚しくする精神性として、インド精神史の中で決して無視することのできない事例の一つだと思われる。

インドの武士道

現代においても猶インドの精神を代表するものと評され、バクティの萌芽が見られることで認知されている『バガヴァッド・ギーター（*Bhagavad-Gita*）』（一世紀頃成立）の中にも注目したい精神性が見られる。それは、自己に課せられた義務、スヴァ・ダルマ（sva-dharma）を、結果を恐れずに行使すべしという主張である。そうした義務、行動規範のうち、特にクシャトリヤ階層即ち武士階級の者たちが保持すべきものをクシャトラ・ダルマ（kṣatra-dharma）と言う。この、インドの武士道ともいうべき行動規範に関連する記述を二大叙事詩の中から網羅的に整理、紹介した研究によると、戦死を遂げた勇士は天女の来迎を受けて天界に至るとされ、よって、武士は義務として課

せられた戦いの場へ決死の覚悟を決めて望むことができ、しかもそれが無上の生き甲斐だったという［原：3,05］。

こうした、自分が今置かれている立場において自分に課せられている義務のもとに一切の蟠りを捨てて行動すべきであるという精神性も、たとえ我が身を賭しても目的を遂行するという行為を後押しするものであろう。

おわりに

ホーリー祭から始めて、思いつくままにいくつかの事例を挙げてみたが、何れも上辺を素通りしただけの拙い紹介になってしまった。輪廻転生、来世、因果応報、布施・喜捨、等々の思想に関して、そうした思想が表出している多くの文献に依拠するなどして、もっと深く掘り下げて検討してからでないと、インドの脈絡での自己犠牲とは何たるかという結論を導き出せるはずもないが、これまで見てきた範囲内で、整理を試みることにする。

インドの宗教、精神世界を形作って来た大きな二つの基盤、即ちヴェーダ祭式主義とウパニシャッド的主知主義とは、どちらも後代、前者はプラパッティ、後者は菩薩行的行為として、自己犠牲精神を顕現させる要素を内包していた。

果たしてそうした自己犠牲精神は、スヴァ・ダルマの概念に後押しされれば、たとえ他者に危害を加える目的の場合であっても発揮され得るものであった。

個人の内的問題として行為主体である自己そのものを放棄しようとする精神性と、自己に課せられた義務の遂行という、個人が社会的存在であることを嫌がうえにも意識せざるを得ないスヴァ・ダルマの概念とは、相矛盾すると思われるかもしれないが、この点インド人は、『バガヴァッド・ギーター』における論理展開［上村 一九九八］のように、巧妙に解き明かす。確かに、人間存在の考察に際して社会性というものを度外視することは出来ないであろう。個人を幾重にも取りまく様々なレヴェルの社会が持つ数多の価値観の中で、個人は翻弄され続けていくものだから。神との合一を目指す自己放棄にしろ、スヴァ・ダルマの概念にしろ、そうした、社会という自己の外なる世界との鬩ぎ合いの中から、自己の内なる世界の解決策として提案されたに相違ない。

さて、ここでもう一度、最初に提示したホーリー祭縁起譚の問題に立ち返って、神話解釈学的視点を加えるなら、ホーリカーもプラフラーダも羅刹族に属す者であったことが注目される。羅刹すなわちラークシャス（rākṣas）とは、インド神話では悪魔の一族としてしばしば登場するが、こうした魔族は歴史上の非アーリア系先住民族をモデルにしたものであると解釈される［Sharma:14］。プラフラーダはアーリア系のバラモンたちにとっても大いに学ぶべき思想を有する学徒であると慕われた初めての非アーリヤ系出身者だと指摘されること［Singh：105］もあるし、「ホーリー祭はシュードラ（＝カースト社会に非アーリヤンが組み込まれヴァルナ制最下層として形成された人々）たちのお祭りだ」という言習わしが存在する［Babb：172］所以である。

ヴェーダ時代から先住の諸民族との融合はかなり進んでいたから、単純な所謂アーリヤ対非アーリヤという構図を設定することは無理なのだが、あえて言えば、プラフラーダをもって象

徴されているところは、もと異端分子であったものが社会的に認知されたことであり、ヒランニャカシプおよびホーリカーはその抵抗勢力であったと解釈できるかもしれない。

未解明のまま残された、プラフラーダ伝説とホーリカー伝説という異なる二つの伝説の接触・融合の経緯が明らかになれば、さらに正確な解釈が可能になるだろう。そして、利他的自己犠牲精神の持ち主プラフラーダに対峙したホーリカーが、なぜ、利己的かつ加害的な自己犠牲的行為に出ることになってしまったのか、判明するかもしれない。

1　平成一三年九月一一日の米中枢同時テロ事件の犯人たちが洗脳されていたという事実は未確認だが、後の報道（例えば『信濃毎日新聞』平成一三年一一月一〇日付け朝刊）によれば、実行犯一九人のうち一二人には自爆テロであることすら知らされていなかったと言う。

2　立花隆「自爆テロの研究」（『文芸春秋』二〇〇一年一一月特別号、九四―一一一頁）に、テロに自殺的特攻作戦を持ち込んだ最初が日本赤軍であったという、ジャーナリスティックな紹介がなされ、更にイスラームの殉教について触れているが、ここでは当然、それとは全く違った視点から、しかも対象地域も異にして、見ていく。

3　ホーリー（holī）の語源は未詳というもの［Williams:430］と、サンスクリットの sola-（苦い、酸っぱい）もしくは solika-（寒さ）に由来すると主張するものもある［Gupte:89-90］が、一般に認められているわけではない。祭りの名称自体はホーリーとホーリカーの双方が併用されているようだが、今日は前者が一般的。文献上、古くは *Kāṭhaka Gṛhya Sūtra*（紀元前七―三世紀）や性愛書 *Kāma Sūtra*（四世紀）にも言及されているという［Anderson:11］。前者については未確認だが、後者にはホーラーカー祭とある［岩本裕訳『完訳カーマ・スートラ』（東洋文庫六二八）平凡社、一九九八、九一頁］。また、中世ヒンディー恋愛文学（アワディー方言）の白眉『パドゥマーヴァティー』（一六世紀）にもホーリー祭の様子が描かれている。［Shireff, A.S.tr. *Padmavati of Malik Muhammad Jaisi* (Calcutta, 1944), p212.］

4　『週刊朝日百科・世界の文学一一六　インドの文学Ⅱ』（朝日新聞社、二〇〇一、一〇月）pp.176-177 に、ホーリー祭の一齣を視覚で味わえるロビン・ビーチ氏の写真が掲載されている。

5　ホーリー祭を収穫祭の観点からコメントしている一例にグプテ［Gupte:88-93］がいる。また、この祭りの開催時期（季節）と祭りの行儀との関連を古典医学書『チャラカ・サンヒター』の記述に基づき解説しているものもある［Caturvedi : 225-230］。

6　カンサは、デーヴァキーの第八子（すなわちクリシュナ）に殺されるという凶兆を得ていたので、自分が殺される前に、相手を殺そうと、羅刹女プータナーを遣わした。『バーガヴァタ・プラーナ』第一〇章など、クリシュナ一代記に語られる。［上村　一九八一：245-249］など。

7　この部分は、最も一般的に語られる、ホーリーの由来をクリシュナ神信仰に位置づけたもの。ブラジとは北インド、マトゥラーを中心とする地域の名称。一方、南インドでは同じ春祭りにおいて対象とされるのは主にカーマ神であるという。［*India Festiva*］

8　この部分の記述は、ヴィシュヌ信仰に、前注に言及したような、カーマ信仰の要素の融合を意識しているように思われる。

9　HolikāとHolākāは同一と見なして良さそうだ(プラークリットにおけるā→iの現象については、R.Pischel, *A Grammar of the Prākrit Languages*, tr.from German by Subhadra Jhā (Delhi,1981), §108, §109を参照のこと)。この作品の写本がカルカッタ（現コルカタ）のAsiatic Society of Bengalに所蔵されているという。[Anderson:226, 230]また、チャテルジーによると、*Holikā-māhātmya*なる小品の写本コロフォン部分には『バドマ・プラーナ』の一部を構成するものと自ら謳っているものの、現存の『バドマ・プラーナ』テキストには、その相当部分がないという。[Chatterjee : 181-182]

10　このプラーナのこの巻（第三巻、この巻のみをBhavisyottara-purāṇaという別名で呼ぶこともあるという）はクリシュナがユディシュティラにあらゆる教則（ダルマ）を教示する設定になっている [Rocher:154]。

11　ヒンドゥー暦（太陽太陰暦）の第一二月。西暦の二月から三月に相当する。ヒンドゥー暦の詳細は、矢野道雄『占星術師たちのインド―暦と占いの文化―』（中公新書、一九九二）、矢野道雄編『インド天文学・数学集』（朝日出版社、一九八〇）等を参照のこと。

12　ヒンドゥーの時間観念では、クリタ（またはサッティヤ）、トゥレータ、ドゥヴァーパラ、カリという四つのユガと呼ばれる時代を想定している。仏教の正像末の時間観念と同様、黄金時代から末法の世へと至る。詳しくは、定方晟『インド宇宙誌』（春秋社、一九八五）を見よ。

13　恐怖心を取り除いてあげること。仏教では布施に、財施（物質的支援）、法施（教育的支援）、無畏施（精神的支援）の三者を立てる。

14　この点、ヴィシュヌ信仰の枠内にあるホーリー祭にシヴァ信仰の影響が指摘される。[Chatterjee : 182]

15　ハーリティーについては、Ananda K. Coomaraswamy, *Yakṣa, Essays in Water Cosmology* (New Delhi, 1993),pp.39-44,を参照。なお、仏典では『法華経』等に出る（中村元『佛教語大事典』（東京書籍、一九八一）、二〇七頁）。

16　筆者がテキストを確認できたのは最後の一者のみで、他は未見。ジャン・ゴーバールの『プラフラードゥの所行』と『バーガヴァタ・プラーナ』中のプラフラーダ伝説との相違点は、後者がsaguṇaなのに対して、これはnirguṇaであるという [Lorenzen: 32]。

17　例えば、Mohanlāl Viṣṇulāl Pāṇḍeyā の *Prahlāda Nāṭak* (1874)など。(R.S.McGregor, *Hindi Literature of Nineteenth and Early Twentieth Centuries*, A History of Indian Literature, Vol.8 ,Fasc.2,Wiesbaden:Otto Harrasowitz, p.93.)

18　サンスクリットのr→ヒンディーのl、および稀ながらその逆のケースもあり得ることについてはS.H.Kellogg, *A Grammar of the Hindi Language* (New Delhi, 1972), §95,97) を参照。

19　また、田中教照「ジャータカ」辛島昇・他監修『南アジアを知る事典』（平凡社、一九九二）三三五―三三六頁も参照。

20　他に、ātmanikṣepa, bharanyāsa, bharasaṃpaṇa などという語も同義に用いられると言う [Varadacharya: 47]。更に、文献毎の使用語彙については、[徳永 一九七二 : 85 注] に詳しい。

参考文献（注で紹介済みのものを除く）

Aiyar, K. Narayanswami (1996, rpt.)(2nd ed. 1916). *The Puranas in the Light of Modern Science*, New Delhi: Asian Publ. Services.

Anderson, Leona M. (1993). *Vsasantotsava, The Spring Festival of India, Text and Traditions*, New Delhi: D.K.Printworld (P) Ltd..

Babb, Lawrence A. (1975). *The Divine Hierarchy: Popular Hinduism in Central*

India, New York: Columbia Univ. Press.

Bailey, G.M.(1986). "For a New Study of the Vāmana Purāṇa", *Indo-Iranian Journal*, Vol.29, No.1, pp.1-16.

The Bhaviṣya-mahā-purāṇam (1984). ed. by Khemarājā Kṛṣṇadāsa, rpt. of Veṃkaṭeśvara ed., New Delhi: Nug Publisher.

Caturvedī, Puruṣottamaśarmā (1988,3rd ed.). *Bhāratīya Vratotsav* (in Hindi), Varanasi: Chaukhambā vidyābhavan.

Chatterjee,Asoke (1967). *Padma-Purāṇa--A Study*, Calcutta Sanskrit College Reserch Series, No.63,Calcutta: Sanskrit College.

Goswami, C.L.(1971).*Shrīmad Bhāgavata Purāṇa*,Gorakpur.

Gupte, B.A.,(2000,rpt.). (1st ed.1916) *Folklore of Hindu Festivals and Ceremonials*, Delhi: Subhi Publ..

Hacker, Paul (1959). *Prahlāda, Werden und Wandlungen eineir Idealgestalt*, Teil 1 (Abhandlungen der geiste- und sozialwissenschaftlichen Klasse,1959,Nr.9), Wiesbaden.

Harris, Richard M. & Rama Nath Sharma (1969). *A Basic Hindi Reader.* Ithaca : Cornell University Press.

India Festiva (CD-Rom)(1996). New Delhi: Magic Software pvt ltd.

Lorenzen , David N. (1997). *Praises to a formless God, Nirguṇī Texts from North India*, Sri Garib Dass Oriental Series No.217, New Delhi: Sri Satguru Publ..

Mani, Vettam (1979)(1st ed. in Malayalam 1964). *Purāṇic Encyclopaedia*, Delhi: Motilal Banarsidass.

McGregor, Ronald Stuart (1984). *Hindi Literature from its Beginnings to the Nineteenth Century*, A History of Indian Literature,Vol.8,Fasc.6, Wiesbaden: Otto Harrasowitz.

Raghavan, V. (1998, rpt.) (1st ed. 1956). *The Indian Heritage*, Chennnai.

Rocher, Rudo (1986). *The Purāṇa*, A History of Indian Literature, Vol.2, Fasc.3,Wiesbaden: Otto Harrasowitz.

Rukmani, T.S.(1970). *A Critical Study of the Bhāgavata Purāṇa*, Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office.

Schreiner, Peter (1983). "Bhakti in the Viṣṇu-purāṇa", *Aruṇa-Bhāratī*, Prof.A.N.Jaini Felicitation Volume, Baroda, pp.273-282.

Sharma, R.S.(1990,3rd ed.)(1st ed. 1958). *Śudra in Ancient India*, Delhi: Motilal Banarsidass.

Singh, Mohan (1940-41). "The Legend of Prahlāda", *Quarterly Journal of the Mythic Society*, New Series, Vol.31,No.1,pp.104-109, Vol.32,No.1,pp.46-54.

Soifer, Deborah A. (1992,rpt.)(1st ed. by State Univ. of New York,1991). *The Myths of Narasiṃha and Vāmana, Two Avatars in Cosmological Perspective* (Sri Garib Dass Oriental Series No.144), New Delhi: Sri Satguru Publ..

Varadacharya, V. (1972-77). "Prapatti", *The Journal of Oriental Reserch Madras*, Vols.42-46, pp.46-56.

Williams, Monier (1883). *Religous Thought and Life in India*, London: John Murry.

上村勝彦（一九八一）『インド神話』東京書籍。

上村勝彦（一九九八）『バガヴァッド・ギーターの世界』日本放送出版教会

田中於菟弥・坂田貞二（一九七八）『インドの文学』ピタカ。

徳永宗雄（一九七二）「Prapatti思想の歴史的展開」『宗教研究』第四五巻第四輯、日本宗教学会、七七―九九頁。

徳永宗雄（一九八九）「バクティ」『インド思想三』（岩波講座東洋思想第7巻）岩波書店、一二〇四―一三三五頁。

中野義照　訳（一九六五）『ウィンテルニッツ　インド文献史　第二巻　叙事詩とプラーナ』日本印度学会。

原　実（一九六八―一六九）「Kṣatra-Dharma ―古代インドの武士道―」『東洋学報』第五一巻第二号〇一―〇三四頁、第三号〇一―〇三七頁、第四号〇一―〇一〇頁。

干潟龍祥（一九五四）『本生経類の思想史的研究』東洋文庫。